



史上最大の世界覇権移行劇上演中！

19世紀は大英帝国が政治・経済の覇権国であり、パックス・ブリタニカ時代と言われ、20世紀には覇権がアメリカに移り、時代はパックス・アメリカナに代わった。

国際政治・経済覇権は世界の軍事・経済力によって決まる。

第二次大戦後、自由主義を御旗に掲げたアメリカが共産主義を信奉するソ連の挑戦を退け軍事・経済において名実共に世界一の覇権国になった。

しかし、今日アメリカの軍事覇権力は中国の台頭で揺らぎ始め、軍事力を支える財政は潜在的破綻状態に陥り、さらに新型コロナの追い打ちで顕在的破綻状態になろうとしている。

一国の覇権は軍事・経済力に依るが、国民の精神にも負うところが大きい。

パックス・アメリカナを支えた精神はパイオニア・開拓精神であった。

国内の開拓を終え、戦後世界制覇に向かったアメリカは、丁度世界を制覇した後、崩壊したローマ帝国の轍を踏もうとしている。

1%のエリートが80%の資産を持ち、99%が年々明日のパンも買えない境遇に追いやられているアメリカ！

今やアメリカはアメリカ・ファースト、自分ファーストの利己主義に陥っている。

そしてアメリカは自らの運命に気づき始めたのである。

歴史の潮の流れを熟知したキッシンジャーは1972年2月のニクソン・毛沢東会談に際して今日のアメリカを予知し、中国に対し将来の覇権移行の準備を促していた。

トランプはキッシンジャーを外交の師として仰ぎ、習近平は毛沢東を信奉する。

今アメリカは安心して覇権を任せるに足る後継者を必要としているのである。

アメリカがおんぶにだっこでミルクを飲ませながら育ててきた中国がやっと成人の年齢になった。

今アメリカは中国からミルク(自由貿易)や衣類(外資)まで取り上げて独り立ちさせようとしている。

私が5歳の時、父は冬になると、母親の猛反対を押し切って、たとえ雪が降っていても毎朝私を庭に連れ出し、パンツ一つの裸の私の頭から冷水を浴びせ、私に竹刀を持たせて「さあ、思い切り父さんを打て！」、そして私がかかると、父は身をかわし思いっきり私の肩から胴から足までを叩いた。

私は全身血が滲む痛さで泣きながら父に向かっていった。

きっと父は私を憎んでいるに違いないと思い続けていた。

だから私は冬になると朝を嫌い父を憎んだ。

しかし不思議なことに、だんだん父に叩かれているうちに快感を覚えるようになり、思いっきり父を叩けるようになった。

ある日私が思いっきり父の面を打つと、父は(わざとかも知れないが)「トシオ、参った！」と言った。

私は嬉しかった。

父は、「もうお前は誰にも負けない！」、「今日で父さんとの試合は終わりだ」と言い、「トシオ、冬(厳しい時)に負けないことだ！」と言った。

私は冬の朝と父が好きになった！

「父親はアメリカ、息子は中国」なのだ！

増田俊男の「インターネット国際政経塾」でこれから始まる新世界秩序を、「易しく」学んでいただきたいと思えます。

きっとお役に立ちます！

本日8月3日(月)午後から第一部 どうしても知っておかなくてはならない「教養学部編」(5講座)をお送りします。